

# 新・瘠我慢の説

経済学者  
渡辺利夫

## 第十二回 海洋国家同盟への道

ウクライナは、旧ソ連の崩壊とともに独立した東ヨーロッパに位置する中立国である。以来、ウクライナは旧ソ連の独立国家共同体（CIS）に属する国々、北大西洋条約機構（NATO）諸国のいずれとも共存をつづけてきたが、旧ソ連圏への影響力を強めるウラジーミル・プーチン氏の時代になり、国内の親露派を通じての内政干渉を強化し、クリミア半島を併合、ついに昨年二月二十四日には国境をまたいで軍事侵攻を開始した。実に荒々しい現状変更である。

日本がソ連（ロシア）から迫られてきた現状変

更は、ウクライナより明白、かつはるかに長期に及んでいる。北方四島が旧ソ連やロシアの領土であったという歴史的事実はない。しかし、旧ソ連は日ソ中立条約をその有効期限内に一方的に廃棄して対日参戦に入り、そのうえ日本がポツダム宣言を受諾した一九四五年八月十五日よりあとの八月二十八日から九月五日までの間に北方四島を占拠するという挙に出た。

ロシアが日本に対して領土的野心をむき出しにしたのは、日清戦争後の三国干渉により遼東半島の清国への還付を日本に迫った時からであった。不

凍港を求めて南下をつづけるロシアにとつて、渤海湾に突き出すこの半島を日本のものとさせるわけにはいかない。ロシアはフランスとドイツを巻き込んで半島の清国還付を日本に強圧してきたのである。

日清講和条約の成立が明治二十八年四月十七日、その一週間足らずあとの二十三日に三国の公使が揃って東京の外務省を訪れ、本国の訓令としてそれぞれの覚書を手交して帰っていったという。日清戦争で日本が国力を蕩尽させていることを見透かしての共同行動だが、条約調印直後の強圧である。何という猛々しさであろうか。

「臥薪嘗胆」、復讐を心に誓って辛苦に耐えるしかない。日本は日清戦争で清国から得た賠償金のほとんどを注ぎ込み、税負担を一段と加重にして軍事増強に努めた。この苦しみのなかにありながら福澤諭吉はひたすらに冷静であり、長期を見据えた大局的な構想力をもって事態を日本に有利に展開させるための方策を思考していた。福澤は同年

の六月二十一日付の『時事新報』に「日本と英国との同盟」を書いた。驚嘆すべきスピード感をもった洞察力だといわねばならない。ロシアという凶暴な軍事大国と抗するには、かの海軍大国イギリスとの連携以外に方途はないと断じたのである。

「抑も英人が自国の利益を衛るために第一の目的とする所のは、露国の南進を防ぎ彼をして海浜に頭角を現はすこと勿らしむるの一事にして、多年來英国の外交攻略と云えば殆どこの一事の外に見る所なしと称するも過言にあらず。元來露西亞の如き大国を束縛して其運動を妨げ、世界中到處に一所の良港をも得ること勿らしめんとは実に大胆なる圧制にして、英国を除くの外に能くも斯くまでの大胆大圧制を試る者は先づ以て地球上にかなる可し」

ではなぜイギリスがかの「光榮ある孤立」を捨てて、日本との同盟関係に入ろうとするか。その動機は何か。福澤の見立てはこうであった。

「英国が是れまで同盟を離れたる所以のものは、

敢て他国と同盟する其事を避け嫌ふたるに非ず、唯露国南進の防御に就き、世界の強國中、英と利害を同ふする者なきを以て、已むを得ず孤立したるのみ。若しも等しく利害を感じて、実力以て相与に共同の敵に当らんと云ふ者あらば、機敏なる倫敦の政府は之を歓迎して、其力を借ることに躊躇せざるや疑を容れず」

「我輩をして強ひて云わしむれば、日英同盟に由りて利益を享ることの多き者は、日本よりも寧ろ英國なりと断言するを憚らざる者なり」

この論説が三国干渉開始の直後、日英同盟成立の六年以上も前に書かれたものであることを知るだけでも、国際環境に対する福澤の予見力が驚嘆に値するほど高いものであったことがわかる。福澤は日英同盟締結の必要性を誰よりもはやく説くと同時に、外交は利害の共存の上にはか成立しないという徹底したリアリズムを、この一文のなかに鮮やかに浮かびあがらせている。

おそらく福澤は、イギリスがアフガニスタン、パ

ルカン半島においてロシアと対立関係にあり、かつポーア戦争と呼ばれる、ダイヤモンド鉾山の利権確保のためにポーア人が建国したトランスヴァール共和国での戦いに大軍を投入していること、それゆえイギリスのアジアにおける最大の権益、上海を中心にして長江流域に広がる巨大権益を失いかねない、そういうイギリスの不安と恐怖のことをよく知っていたのであろう。シベリア鉄道がいよいよ完工に近づいている時期でもあった。日英同盟によらなければ「バクスブリタニカ」は崩れかねないというのが福澤の直感であったにちがいない。

日本は海洋国家である。協調し同盟する相手国も海洋国家でなければなるまい。日露戦争を眼前にして明治三十五年一月に締結され、日本の強大化を恐れる列強により大正十年十二月のワシントン会議で廃棄を余儀なくされるまでの二十年間にわたり、あの時代にあつて日本の安全が保障されたのは日英同盟のゆえであつた。

アメリカとは、大西洋と太平洋とに挟まれた巨

大なる「島」である。日米同盟は日英同盟にかわる新しい海洋国家同盟である。第二次大戦後の七十年間にわたり日本ほどのレベルの平和を、しかも冷戦という大戦争のなかで経験し得た国はわずかにしか存在しないのではないか。日本は冷戦下における日米同盟の明らかなき受益者であった。日本の近現代史において、中国、ロシアは、ほとんど恒常的に日本の敵対勢力であった。日本がこの勢力に対抗するには、日英同盟や日米同盟という海洋覇権勢力と連携するより他に道はなかったのである。

日本の不幸は日英同盟廃棄から日米同盟成立にいたる三十年ほどの間であった。不吉な将来を予感させるように大正十二年に関東大震災が発生、アメリカとの対立、中国への侵攻と敗退、国際連盟脱退、大戦勃発、原爆投下、ソ連軍の参戦、ポツダム宣言受諾と、急峻な坂道を駆け落ちていくかのごとくであった。

今後の日本がかつての日英同盟と同じく、海洋覇権勢力アメリカとの同盟国として生きていくの

か、はたまた大陸国家との連携を深めつつ生存を図るのか。近現代史は日本が採用すべき方途をすでに示している。福澤は先の『時事新報』の論説のなかでこういつていた。

「我輩素より文明立国の自利主義を知らざるに非ず。唯これを知るが故に英人の必ず我れに応ぜんことを信ずるものなり」

三国干渉の屈辱を飲まされて騒然たる状況にありながら、このような伶俐な予見力をもって次代を開くためのプランを練りあげる福澤論吉の心底からのナシヨナリズム、大いなるナシヨナリズムを、現代に生きる私どもはありありと思いきうではないか。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、「成長のアジア 停滞のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇二年、正論大賞。